

# 中国短期大学界限

## 犬養木堂翁の跡を訪ねて

### — 犬養公碑と従軍碑との紹介 —

後藤 亘

中国短期大学から徒歩約十五分のところに犬養木堂翁の生家がある。従って、この界限に本堂翁の道稿、事跡などを探せば、限りないと思われるが、本稿では、故内閣総理大臣犬養公碑と従軍碑との碑文の紹介にとどめる。

#### (一) 故内閣総理大臣犬養公碑

崇神帝時犬養健命随吉備津彦命西征備中遂留焉配祀吉備津神社犬養氏其遠裔也世居庭瀬至公大著干天下公諱毅字子遠号木堂水莊君諱当濟第二子年十四喪怙母小川氏賢撫教備至受漢学於森田月瀬犬飼松窓既長入慶応義塾攻西学家貧飢寒勤苦壳文以充学資為人有智略豪邁不群自期以天下士初執筆報知新聞雄文卓説為世所称大隈伯之創立憲政新党公往投焉議論風發声氣凜然帝國議會初開選為衆議院議員時藩閥勳臣尚立朝專權公弁詰其違憲不少假諸大臣莅議院適見公起登壇相顧失色不覺大息云是以政府忌甚窘迫百端竟不能屈既而公在国民党衆望益重大正元年桂公從内大臣出而任首相公慨曰宮府無別憲政危矣立作憲政擁護会大声疾呼鼓吹國論遠近響應勢如燎原桂内閣遂罷時人頌公曰憲政之神声望之隆至此而極矣先是桂公設同志会羅致国民党之尤公独屹然不動留而收拾殘党率區區之衆死守孤壘至十年之久天下壯之公已解国民党繼以革新俱樂部居数年合政友会推為總裁以昭和六年任總理大臣年已七十七公夙講東洋大計窈窕合從謂日支兩國俱為一体然後可聯諸邦而合之但支那分崩離析我誰与提挈宜先使之自成統一耳於是結友其士大夫説以大勢而忘命志士如康梁如孫黃皆善庇護使成其志此其所以假力統一也公又重産業嘗唱産業立國論明國是所存而其於支那亦欲以産業相結公所自任如此誠使其久居相位則内外之政必有一新人耳目者惜哉遇國家多事之時未暇行其志不幸為兇刃所戕遽薨矣七年五月十五日也是日公燕居兇徒來襲公見其擬手鎗神色自若徐諭曰与語則可曉耳辭氣安舒如語子翁然自古大臣斃于非命者何限未見從容若公高祖訥齋先生從若林強齋受崎門之学五世相伝至公公自少尚風節剛堅不屈事涉大義名分意氣慨然明治末年南北朝正閏論之作公起而弁之於議院遂能動廟議晚喜王学神識高明嗚呼其死生之際綽有餘裕者豈偶然哉公所以為天下士自在事功之外矣公薨之五年庭瀬町謀建公碑使鄉人有所觀感興起介人請予文予辱公誼不可辭略叙見聞所及俾勒于石銘曰

吉備之國	篤生偉人	政党之傑	議院拔群	蹕厲風發	侃侃厥言
翼贊大猷	位極人臣	遺烈在世	千秋不泯	名輝青史	憲政之神

昭和十一年十月

松平康國 撰  
宮島大八 書

## 山内太郎 刻字

碑文であるから、段落も句讀点もなく、その上相当の長文のため読み辛いので、多少の註を加えつゝ読み下すと次のようである。

崇神帝の時、犬養健の命(みこと)、吉備津彦に随って備中に西征し、遂に焉(こゝ)に留まり、吉備津神社に配祀す。犬養氏は其の遠裔(えんえい)なり。世々庭瀬に居り、公に至って大いに天下に著わる。公、諱(いなみ)は毅、字(あぎな)は子遠、号は木堂なり。水莊君、諱は当濟の才二子なり。年十四にして怙(ちゝ)を喪う。母は小川氏、賢にして撫教(手を添えて教える)備(つぶさ)に至る。漢学を森田月瀬、犬養松窓に受く。

既にして長じ、慶応義塾に入り西学を攻(おさ)む。家貧にして飢寒勤苦、文を賣って以って学資に充つ。人となり智略あり、豪邁群ならず。自ら期するに天下の士を以ってす。初め筆を報知新聞に執り、雄文卓説世の称う所と為る。

大隈伯の立憲改進黨を創るや、公往いて投ず。議論風発、声気凜然、帝国議會初めて開かるるや、選ばれて衆議院議員となる。時に藩閥勲臣、尚お朝に立ち権を専らにす。公、其の違憲なるを弁詰し、少(いささか)も假(ゆるさ)ず。諸大臣、議院に莅(のぞ)み、適(たまたま)公の起ちて壇に登るを見て、相顧みて色を失い、覚えざりて大息せりという。是を以って政府の忌むこと甚だしく、窘迫(きんぱく——いろいろなことで敵に迫られて苦しむこと)竟に屈する能わず。

既にして公、国民党にあり、衆望益々重し。大正元年桂公、内大臣より出でて首相に任ず。公、慨(なげ)いて曰く、宮府別無くんば憲政危しと。立って立憲擁護会を作り、大声疾呼、国論を鼓吹す。遠近響に応じ。勢燎原の如し。桂内閣遂に罷む。時に人、公を頌して憲政の神という。声望の隆(さかん)なること此に至って極まれり。

是より先、桂公同志会を設くるや、国民党の尤(すぐれたもの)を羅致するも、公独り屹然(きつぜん)として動かず。留って残党を收拾し、区々の衆を率い、孤塁を死守し、十年の久しきに至る。天下これを壯とす。公、已に国民党を解き、繼ぐに革新倶楽部を以ってす。居ること数年、政友会に合す。推されて總裁となり、昭和六年を以って総理大臣に任ず。年、已に七十七才なり。

公、夙(つと)に東洋の大計を講じ、密(ひそか)に合従(がっしょう)を策し、日支両国俱に一体となり、然る後諸邦を聯(つらね)て之を合すべしという。但、支那の分崩離析す、我、誰と与にか提挈せん。宜しく先ずこれをして自ら統一せしめんのみ。是において交りをその士大夫と結んで説くに大勢を以ってす。而して亡命の志士、康梁の如き、孫黄の如き、皆善く庇護し、其の志を成さしむ。此れ其の力を統一に假す所以なり。公、又産業を重んじ、嘗って産業立国を唱え、明らかに国是の存する所を論じて、其の支那においても、亦以って産業相結ばんことを欲す。公の自ら任ずる所、此くの如し。誠に其の久しく相位(大臣の位)に居らしめば、則ち内外の政、必ずや人の耳目を一新するものあらん。惜しい哉、国事多端の時に遇い、未だ其の志を行うに暇あらず、不幸兇刃の戕(そこな)うところとなり、遽(にわか)に薨(こう)ず。実に七年五月十五日なり。

是日、公、燕居(安居に全じ)し兇徒来襲す。公、其の手鎗を擬するを見るや、神色自若、徐ろに諭して曰く「与(とも)に語らば、則ち暁(あきらか)なるべき耳」と。辞氣安舒、子弟に語るが如し。然り、古より大臣、非命に斃(たおれ)し者、何ぞ限らん。未だ従容(しょうよう)たること公の若き者を見ざるなり。

公の高祖訥齋先生、若きより林強齋、崎門の学を受け五世相伝えて公に至る。公、少きより風節を尚び、剛堅不屈、事大義名分に涉（かゝ）るや、意気慨然たり。明治末年、南北朝正閏論の作（おこ）るや、公、起ちてこれを議院に於いて弁じ、遂に能く廟議を動かし、晩（おく）れて王学の神識高明なるを喜ぶ。嗚呼、其の生死の際、綽（しやく）として余裕あるもの豈に偶然ならんや。公の天下の士たる所以は自ら事功の外にあり。

公、夢ずるの五年、庭瀬町、公の碑を建て、郷人をして観感興起する所有らしめんことを謀り、人を介して予に文を請う。予、公の知誼を忝（かたじけな）うし、辞すべからず。見聞の及ぶ所を略叙し、石に勒せしむ。銘に曰く

吉備の国、篤生の偉人なり。政党の傑なり。議院にて群を抜き、踔厲風発（議論が秀れていて口をついて出る）侃々（強くて正しい）たる厥の言や。大猷（大きなはかりごと）を翼讃し、位、人臣を極む。遺烈世に在って千秋に泯（ほろび）ず。名は青史に輝き、憲政の神なり。

昭和十一年十月

松平康国 撰

宮島大八 書

山内太郎 刻字

この碑文末尾の四字句は、偶数句の第四字目、人、群、言、臣、泯、神の韻が「真」である。（但し、群の韻は「文」であるが「真」と「文」とは通韻といって共通して使われることが作詩上、許されているので、この四字句は見事な四言古詩の形となっていると思う。）

この碑は木堂翁の生家の残っている屋敷跡から、東方約百米のところにある犬養家の墓地の入口の右手に建てられている。この木堂翁の生家は、昭和五十二年に岡山県史跡として保存されることとなり、昭和五十三年から、主屋と土蔵とは国の重要文化財に指定されていて、ここを訪れる人々も少くないので、この碑が現在地に在っては、木堂翁の生家跡を見学する人々の眼にふれにくいので、生家の屋敷内の適な場所に移すがよいという強い意見があるとのことであるが、未だその実現をみるに至っていない。

## （二） 従 軍 碑

国鉄庭瀬駅から中国短期大学に至る中途に岡山市立吉備小学校がある。その正門を入った右手の小庭の池に臨んで、立派な忠魂碑の陰にかくれるようにして「従軍碑」が建っている。碑の文字は五糎大で、相当大きい楷書で、一見して木堂翁の直筆とわかる書体である。碑文は次のとおりである。

甲辰乙巳之役岡山県吉備郡庭瀬町壮丁属第五師团従征露国而戦死傷死病死及蒙重創者各二人其他従軍天死夷險一節凱旋録功蒙賞者凡一百五人嗚呼諸子同長里呂出入相伴慶弔相扶一旦国家有緩急則義勇奉公忠愛忘私而迨其事平也釋兵執鋤退而耦畊田野真不愧乎為 聖世忠良臣民亦可以表章干一邑者也頃日有志胥議建碑以凶不讓來請予銘予嘉其用心之敦也乃為銘曰

死兮何哀	生兮何榮	惟我同胞	忠義作盟	死者盡職	生者有成
執是耒耜	藏彼戈兵	穰穰百穀	以資太平	無謂邑小	亦国之楨

明治四十四年辛亥 四月 犬養毅撰並書

これも碑文であるから、段落も句讀点もなく、書き連ねられているので、多少の註を加えつつ、読み下してみると次のようである。

甲辰（きのえたつ、明治三十七年）乙巳（きのとみ、明治三十八年）の役、岡山県庭瀬町の壮丁才五師団に属し、露国を征するに従いて、戦死、傷死、病死及び重創を蒙りたるもの、各二人、其の他軍に従って夷險（いけん、平地と險地、順境と逆境）に夭死（ようし、本文には矢死又は天死とみえる文字があるが矢も天も天の誤りであろうと思われる。夭死は年若くして死ぬこと）せり。一節凱旋し功を録し賞を蒙れる者、凡そ一百五人なり。

嗚呼、諸子同じく里呂（村のこと）に長じ、出入相伴ない、慶弔相扶け、一旦国家に緩急あれば則ち義勇公に奉じ、忠愛私を忘る。而も其の事平ぐに迫（およ）ぶや、兵を釋（す）て、鋤（すき）を執り、退いて田野に耦耕（ぐこう、並んで耕す）す。真に愧（はじ）ならず。聖世のため忠良の臣民亦以って一邑に表彰すべきものなり。

頃日（このごろ）有志胥議（あいぎ）し碑を建て、以って諼（わす）れざらんことを図り、来って予に銘を請う。予、その用心の敦（あつ）きことを嘉（よみ）し、乃ちこれが為めに銘して曰く

死は何ぞ衰（かな）しく、生は何ぞ榮ある。惟（おも）うに我が同胞、忠義盟を作り、死者は戦を盡し、生者は成るあり。是は耒耜（らいろ、耒も耜もすき）を執り、彼は戈兵を藏す。穰々（じょうじょう、穀物がよくみのる）百穀、以って太平に資す。邑、小と謂う無（なか）れ、亦国の楨（てい、根本）なり。

明治四十四年辛亥（かのとみ）四月

犬養毅撰並書

死兮何哀以下は四言の古詩の形をなし、偶数句の第四字目、榮、盟；成、兵、平、楨はすべて「庚」の韻がふまれている。碑の裏面には、日露戦後、北清事変、日清戦役に出陣されたおおよそ百余名の勇士の位階勲等、氏名が刻まれている。碑の表の文字を刻まれた人は不明であるが、碑の裏面の文字は、太田菅太郎謹書、石工木村栄次郎とあるから、碑の表文の刻字も木村氏であったかもしれない。

この碑は、終戦直後に、一時何処かに移されていたものが、時を見て、再び現地に移し戻されたとのことである。

(一)の犬養公碑は木堂翁と親交のあった松平康国氏の筆になるもので、木堂翁の生涯の大略と木堂翁が護憲の大政治家としての面目躍如たる点が、余す所なく表現されている。それと変って、(二)の従軍碑の方は、木堂翁自筆の文章で、その碑文と筆跡に木堂翁に直接することができるので、これこそ木堂翁の跡そのものである。五、一五事件に、民主主義政治の根本ともいべき「話せばわかる」の名言を遺して木堂翁逝いて五十年、碑を仰いで深い感慨を覚える。

因みに「話せばわかる」の碑は、蓮の博士として有名な大賀一郎氏（庭瀬町出身）の筆になるものが吉備公民館の前庭にあり、吉備中学校の玄関の側らには、元岡山県立朝日高等学校書

道担当教諭河田一夫氏（一白と号す）の筆になるものがある。

木堂翁の像は吉備津神社正面登り口前の広場に、わが国彫刻界の第一人者、朝倉文夫氏の手になった大作が天下を睥睨している雄姿があるし、吉備公民館前には、岡山県出身の著名な彫刻家、岡本錦朋氏の手になる像がある。

木堂翁の生家跡を見学し、翁の墓前に額ずき「話せばわかる」の二つの碑と二か所の像とに接し、犬養公碑と従軍碑の碑文を回想すると、改めて翁の偉大さを覚える。

### 中国短期大学界限犬養木堂翁跡略図

